

それでも終わらない「物語」～inherited will～

満月信仰

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時代が存在していた。人間が、艦娘が、深海棲艦が、皆幸せな笑顔を浮かべている。かつて傷つけあい、殺しあっていた歴史など、まるで初めから存在していなかったかのように皆仲が良い。多少の摩擦はまだ残っているが、不器用ながらも手を取り合い、未来へ進んでいっている。そんな平和な時代があった。

だが、今回は、そんな平和な時代になる前の話。

こんな時代が来るきっかけとなった、ある男と北方棲姫と艦娘達の物語。

目次

0. プロローグ	1
第一章 出会い	
1. 現状なのです…	5
2. 遠征よ!	14

0. プロローグ

ある歴史れきしが終わり

また歴史れきしが繰り返される

それはきつと残酷な事なんだろうね…

え？もつと聞きたいって？

いいよ、また語ろうか…

時代の流れに飲み込まれた歴史を…

誰からも忘れ去られた歴史をね…

これは、ある男と北方棲姫の物語…

人々から「英雄」と呼ばれた男がいた。その男は、突如として人類の前に現れた、「艦娘」と呼ばれる者達をを率いて、深海棲艦と戦う――所謂、提督業をしていた。

彼は戦場で培った類稀なる指揮能力に加え、艦娘と心を通じ合わせる事が出来る力を先天的に持っていた。彼はそれらを活かすことで、深海棲艦との戦いを有利に進め、侵略された海域を解放していった。人々は彼に対しての尊敬と功績を称え「英雄」という呼び名で呼ぶようになった。

そして現在、「英雄」が行方不明になって早5年。人類と深海棲艦の戦いは深海棲艦が優勢になりつつあった…

雲の中を進むようだった。

立ち込める霧が海面を隠していた。視界は悪く、数メートル先すら見えないほど白く霞がかり、空を見上げても太陽の場所すら掴めない。深くずっしりとのし掛かってくるような霧だった。まるで、何者をも近付くことを拒む様な雰囲気醸し出していた。

そんな霧の中を進む船がひとつあった。簡素な船である。しかし、この深い霧を切り開くように、真っ直ぐに、真っ直ぐに進んでいる。その船に乗っているのは一人の男だった。男は視界の悪い中、周りを見渡すこともせず、前だけを見つめていた。

一風変わった男だった。年齢はまだ20代前半だろうか、若い顔つきをしていた。外見は軍人の様で、軍服を羽織っていた。しかし

その軍服は所々がほつれていて、一般的に見られる軍服ではなく、表が白、裏が黒のリバーシブルになっている、そんな珍妙な軍服であった。

長いこと船を進ませているが、船から見える景色は変わらず、霧が立ち込めている。白い塗料で塗りつぶされているかのようにだった。

しかし、その白が元の色に戻るかのように少しずつ、少しずつ薄くなりはじめていた。やがて、霧が薄くなりだすとともに、男の進む先に小さい島が姿を現してきた。その島に近づくにつれて、島の全貌が見え始めてきた。その島は無人島の様であった。灯台や古びた建物などの人工的なものもあるが、鬱蒼と茂った森が島の大部分を占めていた。

男は岸壁に流されないように船を停泊し、海岸に沿うように砂利道を歩き出した。道は荒れ果て、長年整備されていないようであるが、男は迷いのない足取りで道を進んでいっている。

ただ、じやり、と小石を踏みつける音がどうにも不快だったらしく、男は目を細めていた。

男が歩き出してから数分、砂利道の横に門が見えた。門の奥には白と黒の大きい建物が所在しているのが見える。しかし、今となつては、何に使われていた建物なのかわからない程荒れ果てており、完全に廃墟化していた。男はその建物を一瞥しただけで、また視線を前に戻し門の前を通り過ぎて、その歩みを速めた。

男が歩みを止めたのは、海が一望できる丘であった。そこには、小さな墓標と、木造の家があった。それは家と言うには余りにも小さく、少し大きい小屋と言うのが正しいかもしれない。男はまず、墓標の前で立ち止まり、祈るように手を胸の前で合わせた。そして数秒間、その姿勢を保ち続けた。

墓標には、「わすれな」と、文字らしき物が書いてあった様だが、最早読むことは出来ないだろう。

やがて男はその姿勢を解き、今度は家の方へ歩き出した。男が家のドアを開けると、中からとてとと走ってくる足音が一つ聞こえてく

る。

その足音の正体は白い髪を持ち、白いワンピースを見に纏った可愛らしい少女だった。

その少女は男の元へ駆け寄り、腰辺りに飛びついた。その動作は子犬を連想させるようだった。男は少女をあやすように頭を撫で、後ろ手でドアを閉める。静寂が辺りを再び包み込む。

残された広い丘と墓標には、風が通り抜けるだけ。

第一章 出会い

1. 現状なのです…

佐世保鎮守府。

日本の四大鎮守府の一つであり、大本営にとって重要な鎮守府である。佐世保鎮守府は、他の四大鎮守府——横須賀鎮守府、呉鎮守府、舞鶴鎮守府に負けず劣らずの知名度を持つ。

佐世保鎮守府では、多くの艦娘達が生活をしてきた。ある時には出撃して深海棲艦と闘い、ある時には遠征に出て、資源を回収し、ある時には演習を行いお互いを高め合う。これが艦娘達の日常であった。

——しかし、そこは他の鎮守府と決定的な違いがあった。

その鎮守府に本来いるべきはずの提督の姿は無い。建物は荒れ果て、設備はボロボロ。そこに住む艦娘達は絶望の中にいた。

何故提督がいないのか？何故此処まで荒れ果てているのか？何故大本営は何もしないのか？

その答えは佐世保鎮守府の別名、いや、蔑称にあるだろう。此処についたその蔑称は、『見捨てられた鎮守府』又は、『提督の墓場』。

そう——そこはとどのつまり——

「棄てられた」鎮守府だった。

○

鎮守府の中の廊下を電と雷は歩いてきた。廊下は薄暗く、古くなっているのか、灯りが点滅している電灯もあった。二人は今日の分の遠征を終わらせ、部屋に戻る最中であった。二人の足取りは重く、表情

には疲労の色が見えた。

今の時刻は〇一〇〇、真夜中だ。外はすっかり暗くなり、静寂が辺りを包んでいた。暗い廊下に二人の足音だけがひたひたと響いている。

「・・・」

「・・・」

二人は何も喋らない。いや、喋るだけの気力がもう無いのだろうか。

それも仕方ないだろう。今日、彼女らが遠征に行つた回数は10回。それも補給無し、休憩無しで、だ。何故このような苦行じみたことをしているのか。何故なら此処では、資材が無い事がそのまま「轟沈」に直結するからである。

日本の周辺の海は、数年前から急激に深海棲艦の勢力が増した。そして、勢力を増した深海棲艦達は、突如として攻撃する目標を変えた。最終的な攻撃目標は、艦娘ではなく、「提督」と呼ばれる者を優先して攻撃する様になっていった。それが、人類にとつての悪夢の始まりであった。

全国各地で深海棲艦が提督を狙って攻撃するようになり、提督の数が次第に減り始めた。大本営も、敵の標的が変わつた事に気付き、各地の提督達に警戒を呼びかけたが、時既に遅く、提督の死亡数は今までは考えられない程増加した。

佐世保鎮守府はその被害を一番に受けた鎮守府だろう。艦娘達では手も足も出ない深海棲艦が次々に現れ、鎮守府を攻撃し始めた。酷い時には、真夜中に深海棲艦が執務室へ向けて砲撃を行い、部屋ごとバラバラになって死んだ提督や、敵艦載機の攻撃を受け、蜂の巣になって死んだ提督もいた。幾ら艦娘達が警戒しても、時間の関係無しに現れ、攻撃を仕掛けてくる深海棲艦は、彼女らに心身共にダメージを与えた。だが、被害はこれだけに留まらなかった。

元々「提督」とは、「妖精さん」を見る事が出来るという極めて稀な

存在であり、加えて、その中で提督にならない者達もいる事を考えると、提督になる存在は、人類のほんの一握り程度の割合しかいないのである。そんな貴重な存在である提督が、矢継ぎ早に殺されていったらどうなるのか、それは想像に難く無いだろう。

大本営もその事は予期していたようで、早い段階で対策を取った。その対策とは、一度各地の提督達を大本営に召集し、経験を積んだ熟練の提督を順に、深海棲艦の活動が激しい鎮守府へ配置し、比較的安全な鎮守府に、若く未熟な提督を配置するというものだ。この対策のお陰で、深海棲艦の勢力を止めながらも、可能な限り無駄な死を減らし、未熟な者達に経験を積ませ、有望な提督を育てる事が出来るようになった。

——しかし、ただ一つの例外があった。それが佐世保鎮守府である。

佐世保鎮守府の周辺の深海棲艦の強さが他の海と比べてケタ違いに高く、どんなに経験を積んだ提督が着任しても、一ヶ月以内には、良くて重傷、最悪の場合、行方不明もしくは死亡となった。此処だけは、余りにも手の施しようがなかったのである。

そこで、大本営が最終的に佐世保鎮守府に下した結論は、佐世保鎮守府への資材の配給を殆ど打ち切り、艦娘達だけで運営させる、といったものだった。当然、艦娘達からは抗議の声が上がったが、「自分達の力不足のせいで多くの提督を死なせてしまった」という事実を突きつけられ、その責任を負わされ、抗議の言葉も一蹴されてしまった。その結果、駆逐艦や軽巡洋艦は遠征に出て資材を稼ぎ、戦艦や空母、重巡洋艦は深海棲艦の侵攻を食い止める、という今の状況が完成したのである。その為、駆逐艦は出来るだけ多くの遠征を行わなければならない、補給は最低限、入渠など持ったの他なのであった。

○

今日の遠征も終わり、私は今、姉妹艦である電と共に部屋に帰ろうとしている。廊下は薄暗く、少し不気味だ。こんな雰囲気のせいだろ

うか、私達の間には会話は無かった。気分を晴らそうと、明るい話題を上げようとするが、こんな状況で明るい話題なんて出るわけないわよね、と、心の中で自嘲気味に笑う。私達、駆逐艦に出来る事は資材をひたすらに集める事。それだけだった。

「……」

「……?」

そんなことを考えていたら、不意に、先程まで横から聞こえていた足音が聞こえなくなっていたことに気づいた。ちらりと横目で電のいた方向を見ても、電の姿は無い。不思議に思い、ふと後ろを振り返ると、雷から少し離れたところで電は歩みを止めていた。その表情は歪み、目からは涙が溢れていた。

「どうしたの!? 電、大丈夫!?」

私は直ぐに電の元へ駆け寄った。見ると、電はその場に座り込み、その小さな手をぶるぶると震わせ、声にならない嗚咽を漏らしていた。

「ひぐつ…もう…もう嫌なのです…」

私達の艦装はボロボロであり、私は中破、電に至っては大破していた。しかし、中破、大破した状態で遠征に何度も出撃する事は日常茶飯事であった。勿論、その事に異を唱えなかった訳ではない。

少し前、提督の代理を務めている長門さんに、なんとか電だけでも入渠させてあげられないか、と頼み込んだことがある。しかし、現実には非情なものであり、長門さん曰く、ただでさえ高速修復剤は底を尽きてしまったのに、度重なる交戦で大破するものが増え、ドック待ちの艦が減るところが増えている、余裕が全くないようだ。

血が出るほど手を握り、唇を噛み締め、すまない、と私達に謝る長門さんを見ると、これ以上何も言うことが出来なかった。

ふと、ぐうぐうと電のお腹の鳴る音がした。

「お腹も、空いたのです…」

電も私も、ここ数日補給を行なっていないかった。言わずもがな、節約する為だ。その甲斐もあり、遠征は黒字にはなっているが、この時ばかりは自分達の燃費の良さを呪わざるを得なかった。

「大丈夫よ、きつといつかこの生活も良くなるわよ。」

幼子をあやす様に、電に励ましの言葉をかける。しかし、電の表情は曇ったままであった。

「ぐすつ…。でも、毎日毎日同じ事の繰り返し…。もう疲れたのです…。」

私は、電の気持ち痛みほど理解できる。電は、私達姉妹の中で一番遅く此処の鎮守府に来た。だからきつと、そんな感情を表に出すだけ、私よりまだ正常なのかもしれない。

私は「半ば、”諦めて”しまっているのだから。」

こんな状況で、酷い扱いを受けている事に絶望し、変化を待ち続けている自分もいるが、一方で、それを受け入れ、諦め始めている自分があるという事実には、私の心を言い表しようのない虚しさが満ちた。

でも…だからこそ、姉として、電を守らなければいけない、と思っていた。電には希望を捨てないでほしかった。こんな自分の様になってほしくなかった。今の私に出来ることは、電と私が壊れてしまわないよう、励まし、支えることだけだった。私は、諦めかけている自分をぐつと押さえ付け、柔らかい笑みを取り繕って…

「くよくよしていても何も変わらないわ。諦めなければ何かいいことがおこる。きつともう少しの辛抱よ。」

「ー手を差し伸べながら、電に、そして自分自身に言った。」

「だから、もう少しだけ、頑張りましょう？」

電は嗚咽を漏らしながらも、やがて落ち着きを取り戻したのか、小さく頷き、電の手を取り歩き出した。手を繋いで歩きながらも電は、自分自身を励ましていた。

（電の心が折れないように支えなくちゃ、私がお姉ちゃんなんだから。いつか、この苦しみから解放されることを信じて…）

○

艦娘達の寮には部屋にはまだ灯りがついてる部屋が多くあった。この部屋では仲の良い艦、または姉妹艦が共同生活をしていた。艦娘

達が生活している部屋はどこも簡素なもので、家具などは一切なく人数分のボロ布があり、それを床に敷いて寝床にしていた。空気は埃っぽく、とても清潔とは言えない環境であった。

雷が部屋のドアを開けると、まだ部屋には明かりが点いていた。そこには電と雷の姉妹艦である響の姿があつた。響はボロ布の上で横たわっていたが、電と雷の姿に気づくと弱々しく体を起こした。

「ああ…お帰り、電、雷。」

「ただいまなのです…。暁ちゃんはまだ戻ってきてないのです

か…?」

「うん。そうみたいだね…。多分まだ遠征から戻って来てないんだと思う…。」

「最近、帰る時間がどんどん遅くなってるけど大丈夫かしら…。」

「無事に帰ってくるのを待つしかないよ…。電も雷も先に寝て休んだ方がいい。私は暁が帰ってくるのをもう少し待ってるから。」

しかし、そう言っている響の顔も痩せこけていて、目の下にはうっすらとクマができていた。眠いのを我慢しているのだろう。

「わかったのです…。でも、響ちゃんも無理はしないでほしいのです。」

「まあ、善処するよ…。」

「それ絶対思っていないわよね…。まあいいわ。電、私たちは明日に備えて早く寝て、できるだけ休みましょう。」

そう言っただけで電と雷はボロ布を敷き、その上に横たわり、寝る準備を始めた。布は薄く、もはやクッションの役目を果たしてないので、硬い床にそのまま横たわっているような感覚だった。体重がかかっている場所が圧迫され、痛みを訴えてくる。しかも、コンクリートの床の冷たさが容赦なく伝わってきて、二人は寒さに身震いした。

しかし、二人は疲れすぎてしまったのか、はたまたそんな生活に慣れてしまったのか、横たわってからものの数分で眠りに落ちた。

暁が帰ってきたのは二人が眠ってから約2時間後、〇二〇〇だった。

「ただいま。帰ったわ!」

暁の、疲労を感じさせない声には思わず苦笑する。よく、元気が有り余っているものだ。素直に凄いと思う。でも、ちよつとだけ喧しい。

「おかえり、暁。二人が寝ているから声をもう少し抑えてくれないかい?」

暁は、はつと気づいた後、苦笑いをして「ごめん、ごめん。」と音量を落として謝る。元気なのはいい事なんだけどね。

「帰りが遅かったけど、大丈夫だったかい?」

「大丈夫よ。遠征は成功。心配ないわ。」

「すまない：私のせいで暁ばかりに負担をかけてしまつて：。」

暁が、普通の駆逐艦より遅く帰ってくる理由。それは、私にあった。暁と私は、他の駆逐艦より練度が高い事もあり、より遠く、難しい遠征に行っている。だが、少し前、私は遠征中に、敵の砲撃に当たってしまった、大破してしまった。

「私はこの中で一番お姉ちゃんなのよ?妹の為にお姉ちゃんが頑張るのは当然のことじゃない!」

そこで暁は、大破している私の分の遠征を、私に代わつてこなしている。暁は明るく振舞ってはいるが、その負担は相当なものであるだろう。何も暁に返す事ができない自分が情けない。

響「ありがとう。でも、本当に無理だけはしないでほしい。」

響「暁が私を大切に思ってくれているのと同じくらい、私も暁を大切に思っている。」

響「だから、辛くなつたら言つてほしい。大丈夫だよ、これくらいじゃ私は沈んだりしないさ。」

私がそういうと、暁は一瞬だけ目を丸くしたが、すぐに私に笑いかけた。

暁「わかつたわ。でも、本当に今は大丈夫よ?出来るだけ戦闘は避けているし、小破もしてないもの!」

そう、暁の凄いところはそこである。並の駆逐艦より多く遠征に行っているのに、全く傷を負わない。悪いときも小破するくらいだ。實力もあり、私達のことを最優先に考えてくれていて、笑顔を絶やささない。

ああ、やっぱり私達の姉さんはすごいなあ――

と、思った瞬間に、暁が大きな欠伸をした。その欠伸があまりにも間の抜けたものだったので、私は思わず吹き出してしまった。

暁「な、なによっ!」

響「くっ…ふふっ…な、なんでもないよ…」

暁「じゃあなんで笑ってるのよ!もうっ!暁は一人前のレディーなんだから、夜更かしぐらい平気よっ!」

まだ笑いが収まらず、肩を震わせていたら暁が顔を真っ赤にして背中をペンペシと叩いてきた。割と痛い。

響「ごめん、ごめん。お喋りが長くなっちゃったね。そろそろ私達も寝よう。」

暁「まったくもう…。なら、早く寝ましょ!明日も早いわよ!」

そう言って、私達は寝るための準備を済ませて、布団を隣同士に敷き、電気を消した。視界が暗くなり、静寂が辺りを包んでいる。聴こえてくるのは小さな寝息だけ。

消灯してから少し経ったが、当の私はあまり眠くなかった。眠気のピークを過ぎてしまったのか、完全に脳が冴えている。さて、どうしたものか――と、暗闇の中考えていると、何かが自分の肩辺りに当たる感触があった。ふと頭を横に動かし、目を凝らすと、そこには暁の頭があった。

響「暁?」

返事がない。ただのあかつきのようだ。

いやいや、何て下らない事を考えてるんだ私。落ち着け、深呼吸しよう。すーはーすーはー、うん。よし。

冷静になって耳を澄ますと微かに寝息が聞こえてくる。どうやら寝てしまっているようだ。

響「まったく、暁は…」

暁は寝相が悪い。寝ている時に、暁に蹴られて目を覚ますことや、起きた時に暁に自分の布団を取られていて、自分は追い出されていることがしばしば、いや、結構ある。いつもなら、暁を叩き起こしているのだが、今の暁のあどけない寝顔を見ていると、そんな気も失せてしまう。

響「今日だけだからね…」

私は暁に身を寄せ、布団から抜け出してきた暁に自分の布団をかぶせてあげた。布団が狭くはなったが、悪い気はしない。むしろ、暁の体温が暖かく、心地よいくらいだった。暁の暖かさを感じていると、だんだんと眠気がやってきたので、私はこの暖かさに身を委ねることにした。

響「おやすみ…暁…また明日…」

その後、自分の布団とかけ離れた場所で目が覚めた響が、響の布団を占領し、すやすやと眠っている暁を叩き起こすのはまた別のお話。

2. 遠征よ!

きつかけとは、物事が起こる原因、言わば引き金である。この世界は、数多のきつかけで満たされている。あるきつかけで、本来噛み合はずのない歯車同士が噛み合い、偶然か必然か、様々な出来事を生み出す。回っている大きな歯車の力の元を辿っていくと、様々な歯車が複雑怪奇に噛み合っているのが分かる。そして必ず、根底には小さな小さな歯車がある。それと同じように、大きな出来事の背景には、小さい様々なきつかけが存在する。

別れや出会いも、時には革命や戦争さえ、私達が想像するよりずっとずっとごく些細なきつかけで、それらは起こるのだ。

○

ある日の朝、時刻は〇七〇〇。暁型の四人は提督代理、もとい長門に呼び出され、執務室へ向かっていた。集合の詳細は伝えられておらず、いつもと違う状況に、四人は当惑していた。

暁「それにしても、私達全員が呼び出されるなんて久しぶりよね!」
雷「何かあったのかしら…?」

若干、ワクワクした笑みを浮かべる暁とは対照的に、雷は不安の色を浮かべている。四人同時に呼び出されるという事は極めて稀なことであり、雷の様に、何かあったと考えるのは普通のことだろう。

電「心当たりは無いのです…。取り敢えず行ってみるのです!」
響「そうだね。三人とも、そろそろ執務室に着くから静かにしよう。」

四人は執務室の前まで来た。執務室は、分厚い扉で閉ざされている。若干緊張しているのか、四人の表情は固い。響が三人とアイコンタクトを取り、行くよ、と小声で言った後、コンコンと二回ノックをした。

響「響です。暁型四人、到着しました。」

響が声を掛けると、中から、「入ってくれ」と声が聞こえた。四人は執務室の扉を開け、失礼します、と中へ入る。

中に居たのは、提督代理であり先程の声の主である長門型一番艦の長門、その後ろに居るのは、補佐を担当している長門型二番艦の陸奥、そして、机を跨いで天龍型一番艦の天龍、同じく二番艦の龍田の四人であった。

天龍「ようやく来たか、ガキ共！」

龍田「待つてたのよく？」

天龍は屈託のない笑顔を、龍田は微笑を暁達に向ける。暁達は、天龍と龍田が執務室にいた事に驚いているようだった。

電「あ！天龍さんなのです！」

雷「龍田さんも！何で此処に？」

天龍と龍田、この二人は軽巡ではあるが、その燃費の良さの為、遠征へ出向く機会が多い。遠征で同じ艦隊になる事や、人柄の良さもあつてか、二人は駆逐艦達に、頼りになる先輩として随分慕われている。

長門「その問いには、私が答えよう。」

暁達の視線は、目の前の机を挟んで椅子に座っている長門に注がれる。長門の声に四人は思わずピシリと整列した。

長門は少しの間、四人を観察する様に見つめていたが、やがてゆっくりとした口調で話し始めた。

長門「突然の事ですまないが、諸君ら四人には、天龍、龍田と共に長期遠征へ向かってもらう事となった。」

○

その言葉を聴いたとたん、あまりの唐突さに四人は驚き、その後、顔を不安に歪ませた。いきなりで頭が回っていないが、どんなに難しい遠征なのか、いつ帰ってこれるのか、など、”長期遠征”という言葉が、どんと悪い想像を膨らませていた。

しかし、その状況を後ろから見ていた陸奥がクスクス笑い出したの

で、暁達は、はっと

陸奥「長門、あの子達多分勘違いしてるわよ?」

笑っている陸奥に指摘されて、ようやくそんな状況を理解したそんな長門は、少し焦ったように四人に弁明した。

長門「いや、長期遠征と言っても、以前のように効率を考えて、短時間で何回も行っていた遠征ではなく、それよりも少し長い遠征に行ってもらっただけだ。半日程で帰ってこられるだろう。」

電「なんだ…よかったのです!」

暁「もう!びつくりしたじゃない!」

長門の言葉に、四人はほっとした表情を見せた。続けて長門が言葉を続ける。

長門「それと、もう一つ。この遠征が無事成功したら、四人に入渠を許可する事になっている。」

その言葉に、暁達はとても驚き、目を輝かせる。

雷「ほ、ほんとに!?遠征が終わったらお風呂に入ってもいいの!」

響「それは嬉しいな。ありがとう、長門さん。」

響が長門に頭を下げるのにつられて、他の三人も慌てたように頭を深々と下げた。しかし、当の長門は苦笑いをしながら、首を横に振った。

長門「礼なら私ではなく、その二人に言ってくれ。実は、天龍と龍田が君たち四人を入渠させてくれと頼んできたんだ。」

そう言って、長門は二人の方に指を差した。暁達は目を丸くする。

暁「え?天龍さんと龍田さんが?」

電「そうだったのですか?ありがとうございます!」

龍田「私達と言うよりは天龍ちゃんかな」

天龍「は?龍田お前何を…」

龍田「だつて、この提案を考えたのは私だけど、『ガキ共をどうにかして入渠させてあげられる方法はないか?』ってわたしに聞いてきたのは天龍ちゃんじゃない。」

全員の視線が一齐に天龍へ向く。

天龍「~~~~!!あーもういい!俺は先に行くぜ!ガキ共、遅れ

んなよ！」

龍田「あらあらあく。ちよつと苛めすぎちやつたかしら？」

○

天龍「おーい、来たぞー！」

龍田「天龍ちゃん、ちよつと声が大きいわく。」

天龍と龍田は長門から、渡したい物があると言われ、長門の部屋の前まで来ていた。長門の部屋は二人部屋であり、長門の他に、同じ長門型の二番艦、陸奥が部屋を使っている。天龍が呼びかけてから少し経つと部屋のドアが開き、長門が顔を出した。

長門「おお、ちゃんと来てくれたな、天龍、龍田。」

天龍「で？渡したい物ってなんだよ？」

龍田「そろそろ遠征があるから手短に頼むわく。」

長門「そうだったな。ちよつと待っててくれ。」

そう言うと、長門は部屋の奥から大きな箱を出して、天龍達の前まで持ってきた。

天龍「なんだ？これ？」

長門「まあ、開けてみれば分かるさ。」

天龍「ん!?!…これは…バケツ!?!しかも四つ!?!」

龍田「あらあらく。」

長門が持ってきた箱の中にあつたのは、バケツもとい高速修復材だった。高速修復材は、使えば入渠しなくても、すぐに全回復できるという便利な道具である。

長門「これを、暁型の四人に使ってやってくれ。」

天龍「いいのか!?!助かるぜ！」

これから遠征に行く天龍達にとってはまさに朗報だった。これであいつらの傷を治せるのだと思うと、嬉しさが込み上げてくる。しかし、ふと天龍の頭に一つの疑問がよぎった。

天龍「あれ？でもなんで長門がバケツを持ってるんだ？提督が管理してるから許可が無いと使えないんだろ？」

長門「なに、簡単なことだ。私は提督の秘書艦をしているだろう？その工作上、色々なことを任されている。その中に、倉庫の管理の仕事も含まれている。その時に、少し拝借したのさ。」

拝借した。その言葉こそ軽いが、やっていることは重罪である。天龍は少しの間呆気にとられた顔をしていたが、やがてその意味を理解し、狼狽え始めた。

天龍「だ、大丈夫なのか？もしバレたりしたら…」

長門「大丈夫、その辺はバッチリフオロー済みだ。だから構うことなく使ってくれ。」

天龍「ほ、本当か？」

長門「ああ。ビッグ7の名にかけて誓おうじゃないか。」

天龍「そうか…。本当にありがとな、長門。」

長門「いいんだ。今、この鎮守府のほとんどの艦娘が絶望しきって、無気力になり、全てを諦めてしまっている。だが、まだ希望を捨てずに、戦い続けるお前達の様な者もいる。だから、私も出来る限り力になりたいだけさ。」

龍田「暁ちゃん達の代わりにお礼を言っておくわ。ありがとうございませう。」

龍田が深々と頭を下げた。その表情こそいつもと変わらない笑顔だったが、さつきとは違う優しい笑みであった。

龍田「あ、それと〜」

長門「ん？なんだ？」

龍田「その部屋の隅に落ちてる大きく『いなずま』ってプリントされてるパンツは誰のかしら〜？」

長門「ギクツ！そ、それはだな…：そ、そう！落ちてたんだ！」

凄まじい動揺っぷりである。中々に苦しい言い訳であった。龍田はやれやれと溜息をついた後、落ちているパンツを拾い上げ、ニッコリと微笑んだ。

龍田「そうだったんですか。なら、私から電ちゃんに返しておきま

すね〜」

天龍「まあ…ほどほどにしておけよ、長門。」

天龍が生暖かい目で長門を見る。さっきまでの威厳が嘘のようだ。このビッグ7、本当に大丈夫なのか、と天龍は思ってしまった。

龍田「ではバケツ、ありがとうございました〜。」

天龍「じゃあな！長門も仕事頑張れよ！」

そう言っつて二人はバケツを持って部屋を出て行った。後に残された長門は…

長門「嗚呼…私の宝物が…。」

…相当落ち込んでいたらしい。

○

六人は遠征に行くため、発艦場へ来ていた。ここは、艦娘達が出撃する時、又は帰つてくる時に通る出入り口の様な役目をしている。今は各々が抜錨の準備を整えている最中である。

龍田「…つてことがあったのよ〜。」

電「まあ予想はしていたのです…」

電が自分のパンツを龍田から受け取りながら答える。その様子から見るに、長門は常習犯のようだ。主な狙いは駆逐艦である。

響「電はまだいい方だよ。私なんかパンツを唐揚げにされて食べられた事がある。」

雷「私なんかしゃぶしゃぶにされたわよ…」

響と雷が二人揃って遠い目をしている。そんな二人を横目に、龍田は話を続ける。

龍田「まあ、バケツを使わせてくれたのは長門さんだから、お礼を言っついでね〜」

暁「当たり前よ！一人前のレディーとして当然だわ！」

四人は高速修復材によって全回復していた。遠征に行く準備は万

全である。しかし、高速修復材では艤装の傷や損傷は直すことができても、体力面、つまり疲労などを回復する事は出来ない。なので、四人の体力はまだまだ万全とは言い難かった。

天龍「ガキ共、用意はいいか？」

龍田「みんな、用意はいいかい？」

四人「二「いつでも行けるわ！（よ！）（のです！）」三」

二人の問いかけに、四人は元気な声で返答をする。発艦の準備はバツチリだ。

天龍「そうこなくつちな！抜錨だ！」

天龍の威勢のいい掛け声と共に、六人は艤装を展開し、脚で水を切りながら出撃する。

こうして、六人にとって決して忘れることが出来なくなる遠征が幕を開けた…